

絶対に守らなければならないもの

東京大学名誉教授

島崎邦彦

ゼロか1かの思考法から、最悪の場合をも含む、レベル分けした対応へと転換しなければならない。

先日テレビを見ていたら、防災はゼロか1ですという解説者を見て、まだそうなのかと思った。もう、ゼロか1かは止めて欲しい。避難する、避難しない。どちらかしかないというのは、単純な思考である。地震が起こるか、起こらないか、こう問いつめられて、すぐに答えられる人は少ないだろう。ゼロと1の間には、無限の灰色がある。これをばっさり切ってしまうと、迷うことも無く簡単だ。しかし現実には複雑で、割り切れれば、こぼれて失われるものがある。レベル化し、きめ細かく対応しよう。

きめの細かい対応をしなければ、信用を失うこともあるだろう。対応が安全サイドに多少比重がかかるのは、致し方ない。しかし、十把一絡げ的に、必要の無い人まで避難をさせていけば、いずれ狼少年になるのではないだろうか。決めの細かい対応は、それだけ頭も足も使わなければならないし、住民の協力も必要だ。だからといって、骨惜しみをしてはならないと思う。

きめの細かい対応のうちには、稀に起こる最悪の事態も含まれる。ふだん起こらないからと言って、ゼロにしてはならない。対処が難しいからといって、思考停止してはならない。しばしば起こる災害には、なるべく完全に対応しようとしているが、最悪の場合には完全な対応ができない。しかし、だからといって何もしないのでは、すべてを失ってしまうだろう。

最悪の場合でも、絶対に守らなければならないものがあるはずだ。それは、個人、集団、組織により、おのずから異なる。何を守るのか、その選択は容易ではない。しかし、ここで思考停止しては、どうしても守らなければならないものさえ、失ってしまう。

最悪の場合は、絶対にこれだけは守る。そう決めれば、後は守る方法を考えれば良い。なるべく日常生活をかえず、費用もかけない方法があるはずだ。

江戸時代の集落では、家（いえ）の存続が最も大切であった。過酷な年貢を収めるには、各家がそれぞれの役割を果たさねばならない。最悪の場合でも、これを守るにはどうしたら良いか。日常生活もかえず、費用もかからない方法、それが「津波てんでんこ」ではないだろうか。たとえ家族にとって最悪の事態になろうとも、集落としては、それぞれの家の存続を守ることができる。すぐれた知恵だと思う。

最悪の場合、何を守るのか、個人、集団、組織、それぞれで考えよう。それを守るにはどうしたら良いのか、知恵を出しあわなければならない。